

【B年】三位一体主日(2022年6月12日)

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

【旧約聖書日課】申命記 6章4～9節

4聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。5あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。

6今日わたしが命じるこれらの言葉を心に留め、7子供たちに繰り返し教え、家に座しているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい。8更に、これをしるしとして自分の手に結び、覚えとして額に付け、9あなたの家の戸口の柱にも門にも書き記しなさい。

【使徒書日課】

ローマの信徒への手紙 8章12～17節

12それで、兄弟たち、わたしたちには一つの義務がありますが、それは、肉に従って生きなければならないという、肉に対する義務ではありません。13肉に従って生きるなら、あなたがたは死にます。しかし、霊によって体の仕業を絶つならば、あなたがたは生きます。14神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。15あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、「アッバ、父よ」と呼ぶのです。16この霊こそは、わたしたちが神の子供であることを、わたしたちの霊と一緒に証ししてくださいます。17もし子供であれば、相続人でもあります。神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です。キリストと共に苦しむなら、共にその栄光をも受けるからです。

【福音書日課】

マルコによる福音書 1章9～11節

9そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた。10水の中から上がるとすぐ、天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降って来るのを、御覧になった。11すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

申命記 6章4～9節

4聞け、イスラエルよ。私たちの神、主は唯一の主である。5心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くしてあなたの神、主を愛しなさい。6今日私が命じるこれらの言葉を心に留めなさい。7そして、あなたの子どもたちに繰り返し告げなさい。家に座しているときも、道を歩いているときも、寝ているときも、起きているときも唱えなさい。8その言葉をしるしとして手に結び、記章として額に付け、9また家の入り口の柱と町の門に書き記しなさい。

ローマの信徒への手紙 8章12～17節

12それで、きょうだいたち、私たちは、肉に従って生きるという義務を、肉に対して負ってはいません。13肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬほかありません。しかし、霊によって体の行いを殺すなら、あなたがたは生きます。14神の霊に導かれる者は、誰でも神の子なのです。15あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、子としてくださる霊を受けたのです。この霊によって私たちは、「アッバ、父よ」と呼ぶのです。16この霊こそが、私たちが神の子どもであることを、私たちの霊と一緒に証ししてくださいます。17子どもであれば、相続人でもあります。神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です。キリストと共に苦しむなら、共に栄光をも受けるからです。

マルコによる福音書 1章9～11節

9その頃、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた。10そしてすぐ、水から上がっているとき、天が裂けて、霊が鳩のようにご自分の中へ〔異本→上に〕降って来るのを御覧になった。11すると、「あなたは私の愛する子、私の心に適う者〔直訳→私はあなたを選ぶ〕」という声が、天から聞こえた。

黙想のためのノート

次主日教会暦と聖書日課について

・6月12日「三位一体主日」の日課主題は「神の子とする霊」。「聖霊降臨日」に続く主日は、西方教会の伝統で「三位一体主日」と定められてきた。「三位一体」の教理は、キリスト教がローマ帝国下で公認された4世紀、皇帝コンスタンティヌスによって招集された全教会代表者会議「ニカイア公会議」(325年)で採択された正統教理で、「ニカイア信条(ニケア信条)」として文書化され、今日に至るまで東西教会で基本教理とされ、キリスト教会の正統性を測る基準とされてきた(「ニカイア信条」は、381年開催の「コンスタンティノーブル公会議」で一部修正されている)。西方教会でこの正統教理としての「三位一体」を記念する日を教会暦に組み入れるようになったのは11世紀頃とされるが、当初これに教皇庁は反対の立場を取り、14世紀になってようやく「三位一体」の記念日を教会が守るべき通知が教皇から発せられ、16世紀に至って公式の教会暦に組み込まれるようになった。16世紀の宗教改革で分離したプロテスタント諸派も、すでに定着していた「三位一体主日」を継承している。

ニケア信条

(ニカイア・コンスタンティノポリス信条)

私たちは、ただひとりの神、すべてを支配される父、天と地と見えるものと見えないものすべての造り主を信じます。

また、ただひとりの主イエス・キリストを信じます。主は神のみ子、御ひとり子であって、世々に先立って父から生まれ、光からの光、まことの神からのまことの神、造られたのではなくて生まれ、父と同質であって、すべてのものは主によって造られました。主は、人間である私たちのため、私たちの救いのために、天からくだり、聖霊によりおとめマリアによって受肉し、人となり、私たちのためにポンティオ・ピラトのもとで十字架につけられ、苦しみを受け、葬られ、聖書にあるとおり三日目に復活し、天にのぼられました。そして父の右に座しておられます。また生きている者と死んだ者をさばくために、栄光のうちに再び来られます。そのみ国は終わることがありません。

また聖霊を信じます。聖霊は主、いのちの与え主であり、父(と子)から出て、父と子と共に礼拝され、共に栄光を帰せられます。そして預言者によって語られました。私たちは、ひとつの聖なる公同の使徒的な教会を信じます。罪のゆるしのための一つのパプテスマを認めます。死者の復活と、来たるべき世のいのちを待ち望みます。アーメン。

(日本キリスト教協議会共同訳『讃美歌 21』所収)

・「ニカイア信条」によって定義づけられる「三位一体」の教理は、御子キリストの御父との同質性に関するアタナシウス派とアリウス派の間での「キリスト論」論争の帰結として確立した。アリウス派は、「聖書」の記述に基づいて護教教父らが展開してきた、御子が御父に対して従属的な地位にあるとする「モナルキア主義(単一神論)」を主張していたが、「神は、実体(ウシオス)において一つであり(ホモウシオス)、父なる神・子なる神・聖霊の三つの位格(ヒュポスタシス)において永遠に存在する」と定義したアタナシウス派の主張が正統教理とされた。

・「ニカイア信条」の「三位一体」教理については、その後の東西両教会間で、大分裂(1054年)に至る論争が生じている(「フィリオクエ問題」として知られる)。「聖霊」の発出源に関する「ニカイア信条」の表現は、原文(ギリシア語)において「聖霊は…父から出て」となっており、西方教会が公式に採用していたラテン語版でも同様の表現となっていたが、西方の諸地域教会では7世紀頃までにこれを「聖霊は…父と子から出て」と改変して典礼文に用いることが起こっていた。教皇庁は、これを追認する形で9世紀に、「と子から(フィリオクエ)」という語を加えたラテン語典礼文を正文としたため、東方コンスタンティノーブル教会との間に深刻な対立が生じ、11世紀の大分裂(両教会のローマ教皇・コンスタンティノーブル総主教が相互に破門宣告)に至った。この大分裂(相互破門状態)は、1965年に開催された第2ヴァチカン公会議を経て両教会が共同宣言を発表して解消されている。

・「三位一体」の教理は、現代に至るまで神学論争の対象となっており、必ずしも確立した基本教理とは言えない。近代プロテスタント諸派の中には、正統的な「三位一体」論を軽視または事実上否定する立場をとる教会もあり、非三位一体的な「唯一神」論を掲げるさまざまな形態の「ユニテリアン主義」は、教派を越えて広く影響を及ぼしている。「ユニテリアン主義」の諸形態は、すでに古代教会で論争されてきた神学論争の再燃であり、「アリウス派」に代表される「モナルキア主義キリスト論」や「養子的キリスト論」、「様態論的キリスト論(サベリウス主義)」などの共通性が認められる。

・「三位一体」の教理に関する神学論争は、御子キリストをいかに定義づけるかという「キリスト論」を巡る論争として展開されてきた。しかし、近年は、「教会共同体」をいかに定義づけるかという「教会論」の基礎となる「聖霊論」を巡る神学課題として「三位一体」の教理が議論されることもある。

・旧約聖書日課は、「申命記」から、「聞け、イスラエル(シエマ・イスラエル)」で知られる箇所冒頭。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、内在する「霊」の存在によって「神の子」とされている希望を示す箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、主イエスの洗礼の場面を伝える箇所。

旧約日課(申命記 6章より)

- ・「申命記」は、ユダヤ正典「律法」の第五巻で、「出エジプト記」から始まる「モーセ物語」の完結部を構成する。日課箇所は、前章(5章)で「十戒」が再告知されたのに続いて、「掟と法」の授与された経緯を踏まえつつその意義が告知される箇所(～11章)の冒頭の一部。ユダヤ会堂で「シエマ」と呼ばれる典礼文の冒頭。「シエマ」は、申命記 6:4~9、同 11:13~21、民数記 15:37~41 から構成されるイスラエルの信仰告白宣言文で、安息日礼拝の中に位置づけられるほか、ユダヤ教徒は毎日 2~3 回唱えるように教えられている。
- ・4~5 節は、主イエスが「最も重要な掟」として教えられた「あなたの主なる神を愛しなさい」の典拠として引用された聖句(マタイ 22:37、マルコ 12:29~30。またルカ 10:27)。主イエスの時代には、会堂礼拝の原型はすでに成立していたと考えられ、会堂に所属するユダヤ人としての共通理解を示されたものであったと推認される。
- ・6~7 節では、家庭における信仰教育として「聖書」教育が指示されているが、同様の趣旨の指示は、正典「律法」全体で繰り返し示されるもので、正典成立後(バビロン捕囚後)のユダヤ教において、会堂と共に家庭における「聖書」教育が重要な位置づけを与えられていったことが示唆される。もっとも、実際の「聖書」教育は、各家庭ごとに行われるよりも、所属する会堂に安息日以外にも通わせて集団で学ぶ「学校」形式で為されてきた。
- ・8 節の指示は、今日まで「テフィリン」として知られる装束の伝統となっている。下図参照。



使徒書日課(ローマ 8章より)

- ・「ローマの信徒への手紙」は、使徒パウロが未訪のローマ教会共同体に宛てて記した書簡。パウロがエフェソに滞在して宣教活動を行っていた時期に、エルサレム行きとその後のローマ訪問・エスパニア宣教の計画を事前に伝える意図で執筆されたと考えられる。日課箇所は、三週前の「復活節第 6 主日」に使徒書日課として設定されていた箇所の直前に当たるので、文脈上の解説は「聖書と祈りの会 220518」を参照。
- ・「パウロ書簡」において、「霊」と「肉」の用法は他の新約文書と異なる様相を示している。パウロは通例、「霊(プネウマ)」と「肉(サルクス)」を対立概念として位置づけ、「霊」を「神／天からのもの」、「肉」を「人／地上からのもの」を指す用語として用い、人間の行為等における事象の由来・帰属を示すために用いている(典型的な事例は、「ガラテヤの信徒への手紙」5:18 以下に見られる)。そこで、単に「霊」と言った場合、そこに人格的な性質は、通例では想定されていないと考えられる。ところが、日課箇所では、多少異なる用法で「霊」を取り上げている。すなわち、人に内在化して人格的に働きかけるものとしての「霊」が扱われているが、おそらくこれは、14 節「神の霊」、15 節「神の子とする霊」、16 節「わたしたちの霊」など、具体的に人格化されて表現される「霊」の事例に引きずられてのことだろう。
- ・パウロは、前段 7 章までで、「律法」が人に「罪」を犯させるという問題を取り上げて、その根本的原因が、「肉」に支配された人は、その内在する「罪」に対して自身でうまく対処できない状態にあるということを示していた。パウロは、人に内在する問題を取り上げる中で、ある種の無意識(潜在意識)の問題に目を向けようとしている(7:15 以下)。そして、人が地上に生きる者として「肉」から完全に自由になっていない状態であったとしても、すでに「神の霊／神の子とする霊」自身が内在化して直接に働きかけてくださる事実があることを論拠付けようとして、「この霊によってわたしたちは、『アッバ、父よ』と呼ぶのです」(15 節)と、すでになされている祈りの実践を挙げているのである。パウロは、6 章で、「洗礼」によってキリストと結びつけられることで人が「神の子」に等しい者とされる、という初代教会で共有されていたと考えられる教えを示しているが、日課箇所に至って「神の霊」の内在化を取り上げることによって、これを補完しているのである。
- ・日課箇所には、正統教理としての「三位一体」とは異なる形式の、「父・子・聖霊」論が展開されているとすることができる。すなわち、三者の形式的な関係性や実体について問うことなく、父(である神)と子(であるキリスト)との父子関係を基礎に、「神が(人を)子とする霊」の内在によって人も同じ父子関係に入るといふ、「信仰者」論としての「父・子・聖霊」論である。これは、上述のように、初代教会で「洗礼」論と共に構築された教理と考えられる。

福音書日課(マルコ 1 章より)

・日課箇所は、主イエスの洗礼の出来事を伝える箇所、共観福音書が共通して伝えている。共観福音書は、この出来事を、洗礼者ヨハネの紹介記事の一部として構成しており、「イエスの洗礼」が「ヨハネの洗礼」との連続性を持ちながら新たな側面を付加されたものであることを示す意図があると考えられる。共観福音書中、「マルコ」と「ルカ」は、ほぼ同様に描いており、また洗礼を受けられた主イエスの主観的立場での叙述となっているが(天からの声の呼びかける人称が二人称「あなた」、他方で「マタイ」には大きな付加部分があり、また叙述自体が客観的立場での叙述となっている(天からの声が呼びかける人称が三人称「これ」)。

・主イエスの洗礼は、まぎれもなく洗礼者ヨハネによって授けられたものであり、「ヨハネの洗礼」を包含するものであることは否定できない。これは、単に「洗礼」の問題であるというよりは、「洗礼者ヨハネ」と「イエス」との関係性についての問題が背景にある。焦点は、「イエス」によって何が新しいものとしてもたらされたのか、という点である。それを端的に示すのが、この「イエスの洗礼」の逸話に託されたことである。すでに洗礼者ヨハネの紹介記事の中で告げられているように、「ヨハネの洗礼」が「水による洗礼」と表現されるのに対して、「イエスの洗礼」は「聖霊による洗礼」の始まりに位置づけられる。ヨハネの「水による洗礼」は、「悔い改めの洗礼」とも言い換えられ、もっぱら人の「悔い改め」のしるしとして考えられている。一方、イエスの「聖霊による洗礼」は、日課箇所では描かれるように、天からの御声によって「神の子」と宣言されることと結びつけられており、神の恵みとしての御業のしるしとして提示されているのである。

来週の誕生日 (6月12日～18日)**主日礼拝の讃美歌から**

・21-351 番「**聖なる聖なる**」(=□12 番、I66 番)は、19 世紀初頭に英国教会司祭として詩作に活躍した R・ヒーバーが「三位一体主日」のために作詞。曲は、この歌詞のために 19 世紀に教会音楽家として活躍した英国教会司祭 J・B・ダイクが作曲し、「NICAEA (ニケア)」の曲名が付されている。

・21-425 番「**こすずめも、くじらも**」は、1983 年、米国ミズーリ州のコンコーディア・ルーテル教会の設立 110 周年記念のために新しく作られ(作詞作曲は 82 番「今こそここに」と同じコンビ)、後に諸教派の讃美歌集に採用された。

・21-512 番「**主よ、献げます**」(= I 339 番「君なるイエスよ」)は、19 世紀に女流詩人として知られたハヴァガルの作詞で、ある滞在先で経験した集団回心に感謝する中で作られたとされる。一時は広く歌われていたが、現在では、メソジスト讃美歌集のみで残る。

21-351「聖なる聖なる」**Holy, Holy, Holy, Lord God Almighty**

1. Holy, holy, holy! Lord God Almighty! / Early in the morning our song shall rise to thee. / Holy, holy, holy! Merciful and mighty, / God in three persons, blessed Trinity!
2. Holy, holy, holy! All the saints adore thee, / casting down their golden crowns around the glassy sea; / cherubim and seraphim falling down before thee, / which wert, and art, and evermore shalt be.
3. Holy, holy, holy! Though the darkness hide thee, / though the eye of sinful man thy glory may not see, / only thou art holy; there is none beside thee, / perfect in power, in love and purity.
4. Holy, holy, holy! Lord God Almighty! / All thy works shall praise thy name, in earth and sky and sea. / Holy, holy, holy! Merciful and mighty, / God in three persons, blessed Trinity.

21-425「こすずめも、くじらも」**God of the Sparrow**

1. God of the sparrow / God of the whale / God of the swirling stars / How does the creature say Awe / How does the creature say Praise
2. God of the earthquake / God of the storm / God of the trumpet blast / How does the creature cry Woe / How does the creature cry Save
3. God of the rainbow / God of the cross / God of the empty grave / How does the creature say Grace / How does the creature say Thanks
4. God of the hungry / God of the sick / God of the prodigal / How does the creature say Care / How does the creature say Life
5. God of the neighbour / God of the foe / God of the pruning hook / How does the creature say Love / How does the creature say Peace
6. God of the ages / God near at hand / God of the loving heart / How do your children say Joy / How do your children say Home

21-512「主よ、献げます」**Take My Life and Let It Be**

1. Take my life, o ments and my days; / let them flow in ceaseless praise. / Take my hands, and let them move / at the impulse of thy love. / Take my feet, and let them be / swift and beautiful for thee.
2. Take my voice, and let me sing / always, only, for my King. / Take my lips, and let them be / filled with messages from thee. / Take my silver and my gold; / not a mite would I withhold. / Take my intellect, and use / every power as thou shalt choose.
3. Take my will, and make it thine; / it shall be no longer mine. / Take my heart, it is thine own; / it shall be thy royal throne. / Take my love, my Lord, I pour / at thy feet its treasure-store. / Take myself, and I will be / ever, only, all for thee.